

# ビザンチンモザイクの濃密感

大橋力  
千葉工業大学



VR文化フォーラムの幕開けにあたって、VR学会の先生方を中心に組織している科学研究費補助金国際学術研究「ユネスコ世界遺産のバーチャルリアリティを応用した体感システムの構築」で収録・編集したハイビジョン映像をご覧くださいと思います。

この国際学術研究は、わたしたちが万全の配慮をもって後代に伝えるべきユネスコ世界遺産を高精度で電子記録するとともに、遺産に直接接することを求める人々の増大に伴う環境破壊を避けるために、世界遺産の情報環境を遠隔地で高いリアリティのもとで体験可能な体感システムを開発することをめざして、平成10年度から3年間にわたっておこなうものです。ある意味でこれは、VRが文化そのものと直接的に関わる局面にあたるといえます。その第一歩として、高精細映像でなければその感性情報の本質を伝達できない世界遺産の視覚情報を、非圧縮のハイビジョン映像として記録するための海外調査をおこなっています。

今日ご覧いただくハイビジョン映像「ECHOSCAPE WORLD HERITAGE UNESCO -- Byzantine Mosaic in Italy」は、平成10年夏におこなったイタリアの多様な世界遺産の映像記録を、“ビザンチン・モザイク”というテーマのもとで構成したものです。

イタリアには、東洋的性格を色濃く宿すビザンチン文化の影響を受けたすぐれたモザイクが多数存在しています。ご存じの方も多いと思いますが、モザイクは色ガラスや色大理石の小塊（テッセラ）を生乾きの漆喰に埋め込んで画像や装飾モチーフを表現するもので、建築物とりわけ聖堂の天井、壁、床の装飾として発達してきました。漆喰で固められたモザイクは強固で、テッセラが退色することもないので、モザイクはきわめて永続性のたかい表現となりえます。

中世においてビザンチン帝国領内各地でさかんにもち

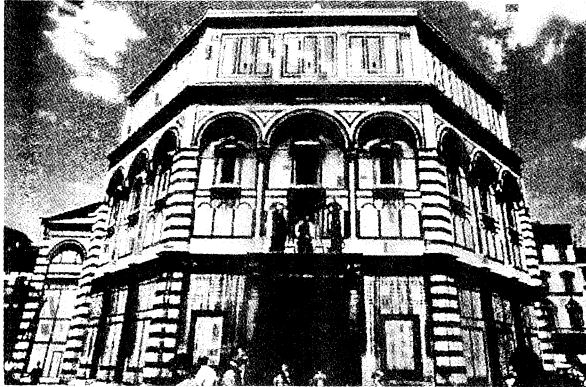
いられたモザイクは、5世紀から6世紀にかけて、イタリア中部の都市ラヴェンナで頂点を迎えました。とりわけ、この時期には、透明なガラスに金箔をはさみこんだ金色に輝くテッセラが多用されるとともに、緑、青、黄、赤、紫、白などの鮮やかな色彩の華麗さを一層強調する対比的な配色がなされ、キリスト教会の装飾として光輝く聖空間が生み出されました。

ビザンチン・モザイクでは、鮮やかなテッセラで描かれた可憐な花々や緑の草に彩られた大地、華麗な衣装をまとった聖人たち、その足もとであそぶ白い羊や鳥、小動物たちは決して写實的に描写されてはいません。さらにきわめて現代的な印象さえあたえる象徴性・抽象性の高いモチーフも多くもちいられています。中世後期に発達したローマン・モザイクにくらべて、ビザンチン・モザイクの特徴はその抽象性・象徴性にあるといえるでしょう。ビザンチン・モザイクは、現実世界を超越した不思議なリアリティをもった精神世界の表現として、千年以上の時を超えてその制作当初の輝きを現代に伝えているのです。

私は、「バーチャルとは、みかけや形は原物そのものではないが、本質的あるいは効果としては現実であり原物であることであり、それぞれのものには、本質的な部分があってそれを備えているものがバーチャルなものである」という館会長の説を全面的に支持するものです。こういう立場から見ると、ビザンチン・モザイクのもつ濃密感は、バーチャルリアリティの本質に通じるものがあるのではないかと、深く魅かされている次第です。

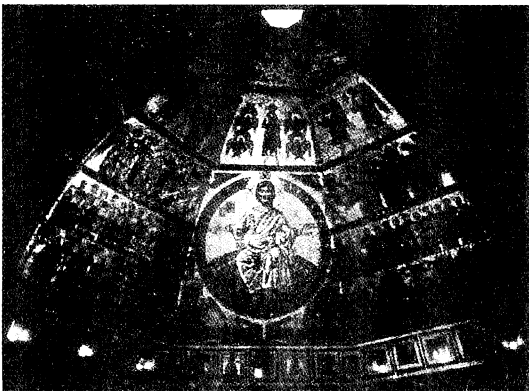
しかも、このビザンチン・モザイクでは、テッセラひとつひとつが複雑な内部構造、テクスチャーをもっています。したがってその感性情報の本質は高精細映像でなければ伝達は困難です。そこで、今回の撮影では、230万画素のハイビジョンカメラで撮影した映像を非圧縮のデジタルレコーダーに記録し、編集もフルデジタルでおこないま

した。作品の構成にあたっては、アカデミックな資料価値とビジュアルアートとしての感性効果との両立をねらい、とくに音楽とのコラボレーションを重視しました。今回とりあげた撮影対象は下記の通りです。



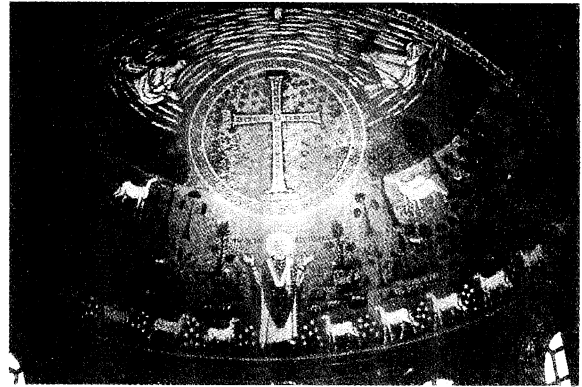
(1)サン・ジョバンニ洗礼堂 (フィレンツェ)

フィレンツェの守護聖人サン・ジョバンニにささげるために11世紀に建造された八角堂。壮麗な天井のモザイクで知られる。



(2)サンタポリナーレ・イン・クラッセ教会 (ラヴェンナ)

ラヴェンナは、中世ヨーロッパにおける古代ローマ文化とビザンチン文化の融合の地として知られている。6世紀半ばにたてられたこのバジリカ式聖堂では、6～7世紀につくられたモザイクが内陣を飾っている。



(3)サン・ピターレ教会 (ラヴェンナ)

ビザンチン芸術の至宝とたたえられ、ラヴェンナの初期教会群を代表する教会。6世紀前半に建造され、内陣側壁のモザイクは、ビザンチン様式の傑作といわれている。



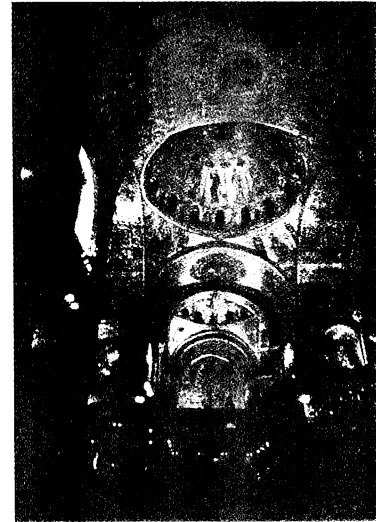
(4)ガーラ・プラチーディア廟 (ラヴェンナ)

5世紀半ばに建造された霊廟で、内部を埋め尽くす色彩豊かなモザイクは、ラヴェンナでもっとも古いもののひとつ。



#### (5)サン・マルコ寺院 (ヴェネツィア)

9世紀に建造されたロマネスク・ビザンチン様式の聖堂。内部は黄金のモザイクで飾られ、その壮大さ、絢爛さはまさに魂を奪う。今回、ユネスコの協力によって、わずか5時間ではあったが、堂内の2000灯の明かりをすべて点灯した状態での撮影が実現。



今回はひとつの映像作品として収録映像をまとめてみましたが、今後はこれらをリソースとして活用し、VR体感システムの構築へとむすびつけていきたいと考えています。

#### <研究組織>

大橋 力 (千葉工業大学/研究代表者)、山崎芳男 (千葉工業大学)、三井田惇郎 (千葉工業大学)、原島 博 (東京大学)、廣瀬通孝 (東京大学)、仁科エミ (メディア教育開発センター)、河合徳枝 (国際科学振興財団)、不破本義孝 (四日市大学)、八木玲子 (国際科学振興財団)

#### <制作スタッフ>

制作総指揮：大橋 力、プロデューサー：河合徳枝、制作マネージ：仁科エミ、撮影・編集：大橋 力、カメラアシスタント：前川督雄、作曲：山城祥二、演奏：芸能山城組、サウンドエンジニア：不破本義孝

#### 【著者略歴】

大橋力 (山城祥二) (OHASHI Tsutomu)

1933年、栃木県生まれ。作曲家、演出家。芸能山城組主宰。映画『アキラ』の音楽で日本アニメ大賞最優秀音楽賞受賞('87)。音楽、劇場作品多数。東北大学農学部農芸化学科卒業。文部省放送教育開発センター教授などをへて、現在、ATR人間情報通信研究所感性脳機能特別研究室長、千葉工業大学情報ネットワーク学科教授。農学博士。聞こえない高周波の感性効果 (ハイパーソニックエフェクト) を発見。パリ島をはじめ非西欧文化圏のフィールドワークも重ねる。今回は、文部省科学研究費補助金国際学術研究で撮影したイタリア世界遺産のハイビジョン映像を初公開。